THE LONDON SCHOOL OF ECONOMICS AND POLITICAL SCIENCE

CENTRE for ECONOMIC PERFORMANCE

2018 年　冬　留学報告書

2018 年 12 月 2 日

London School of Economics/CEP

武田　航平

ロンドンで迎える 4 回目の冬。天気はあまりすぐれませんが、そこまで寒くもなく、比較的過ごしやすい感じです。このタームも残り二週間となり、研究発表、ティーチングなど慌ただしさが増してきています。

講義はなくなり、普段はティーチングと毎週行われるセミナー以外は、自分の研究を進めています。一つ目の研究は以前のレポートでも少し説明しましたが、日本の過去 45 年間の高速鉄道、高速道路の整備と、それが都市の成長に与えた影響に関する論文です。このテーマ自体は、ここ 10 年くらいの間に、地域経済学、都市経済学で盛んに議論されている内容ですが、僕たちの研究では多地域セッティングの集積モデルが導くインプリケーションと実際のデータをはじめて結び付けることを目的としています。例えば、交通網の整備が一様でない以上、交通網の整備と都市の成長の間には非線形な関係があり、それをネットワーク中心性を利用してうまく捉えようということです。この研究は、この 12 月にシンガポールや日本でも発表をして、ブラッシュアップしていきたいと思います。別の研究では、以前少しお話をした、都市内でのセグリゲーションに関する研究、都市内での犯罪の分布の研究、および時空間成長のテーマについて研究を続けています。これらすべての研究に共通しているのは、すべて「空間」を軸にしているということです。国際貿易では国と国、国内の貿易では地域間あるいは都市間、都市内での生活では通勤および居住地選択、職場選択、など私たちの経済活動は、範囲は異なるにせよ空間と関連しているわけですが、そのメカニズムにはまだまだ分からないことがたくさんあります。一般に、国際貿易や都市経済学を含む意味で「空間経済学」と呼ばれる分野ですが、近年研究もより盛んになってきていると思います。というのも、一つ目に、近接分野（同じ応用ミクロ経済学）である開発経済学や労働経済学などにも明示的に「空間」を取り入れようとしている流れがあるからです。例えば、近年政治問題にもなっている移民の流入などについては、移民がどの都市、地域に集中するか(sorting)、そしてそれがその地域の（あるいは別の地域への波及を通じて）労働市場にどのように影響を与えるか、というテーマは流行りの一つです。重要な課題であることが明らかなので、政策的インプリケーションを与えやすいという意味でも「売れる研究」なのかもしれません。二つ目の流れとして、最近ではビッグデータを使った分析も徐々に始まってきています。例えば、いままでヒトの移動を追えるデータというのはなかなかなく、あったとしても集計された OD データくらいでしたが、最近ではスマートフォンに内蔵された GPS データをトラックして高精度な移動データが構築されるようになりました。一部の国では、特定の企業がこのデータをもっており、経済学の研究でもミクロのヒトの流動と、それが与える経済活動への影響およびそのメカニズムを見るのに非常に役立つ可能性があります。これから、企業と経済学者が組んでビッグデータをますます活用できるようになれば、いままではブラックボックスになっていた部分を解明していくことが可能になっていくのではないか、と考えています。僕自身も、自分の研究でその可能性を探っていきたいと思います。

研究関連以外の時間は、ティーチングです。今年は、経済学部ではなく、経営学部でミクロ経済学を教えています。事前に思っていたよりも、学部間で違いは感じられません。ただ、今年から LSE はティーチングの改善を掲げており、TA に対するトレーニング、カリキュラム変更、および授業評価の方法など色々と改革中で、いろいろと大変そうです。というのも、経済学部はいろいろと改革中なのですが、経営学部は幸いにしてそういったものがないので、僕自身はそんなに変化を感じていません。学部生の満足度が低いのは、TA のせいなのか、授業そのもののせいなのか、それとも他の要因なのか、よくわかりませんが他の(イギリスの)大学はどうなのでしょう。

さて、とりとめがないレポートになってしまいましたが、今後も、時間の使い方を計画的にして、溜まっている研究および研究ネタを一つ一つものにするよう、益々精進していきます。